

行政視察報告

(地域振興委員会)

<視察目的>

- 日田市における林業の現状から、スマート林業・林業イノベーションの現在について伺う。
- 無泥養殖どぜうの取組、養殖法技術導入効果と今後の技術動向、産学官民共創による地域ブランディングの構築や販路開拓支援体制について伺う。
- ジビエ処理研修施設の現状と今後の展開から、捕獲鳥獣の利活用状況と付加価値の創出について伺う。

<視察概要一覧>

視察月日	視察先	視察施設	視察内容
7月4日	大分県 日田市 宇佐市	日田市役所	森林・林業・木材産業振興ビジョン
		宇佐養魚株式会社	無泥どぜう養殖法技術
7月5日	大分県 宇佐市	日本ジビエアカデミー	鳥獣害防除・捕獲・処理・活用技術

<視察概要報告>

1. 大分県日田市

◆ 基本データ

人 口 60,557 人 / 2024 年（令和 6 年）5 月現在
世 帯 数 27,648 世帯
面 積 666.03 km²

◆ 対応部署

林業振興課 林業振興係 森林整備係

◆ 説明概要

森林・林業・木材産業振興ビジョンについて

< 日田市役所 >



◆ 考察

福井 加代子 委員長

日田市は人口 6 万人余り、高齢化率 36,8%（安来 37,4%）人口密度 94 人（安来 88 人）大学はなし等々、人口は違えど、安来市と似ている所もある市で、きれいな水で有名な所でもある。ただ毎年、災害があり、視察に行く直前にも三郎丸橋が傾き、崩落のおそれがあるという報道もされていた。

そして去年 8 月に椋野美智子市長が誕生されたことで、視察に行く前から特別な思いでございました。

椋野市長の今後のご活躍も期待しております。

日田市は約 83%が森林、先人の努力により日田杉などの森林と自然環境が築かれてきた。この機能を持続的に発揮させ、将来、森林を適切に整備、保全するため、平成 27 年 3 月に「新しい日田の森林、林業、木材産業振興ビジョン」が策定された。その後、令和 2 年 3 月に第 1 次見直しをしながら、今回、第二次見直しをされた。これまでの取り組みの検証を行い、社会、経済情勢の変化を踏まえ、加えて ICT をはじめとする先進技術を活用したスマート林業による効率化などを図ることや、カーボンニュートラル社会の構築に向け、関係団体と連携した林業人材の確保、育成の取り組み、広葉樹林化などによる災害に強い森林づくりを推進することなどがビジョン改訂に盛り込まれている。

まず、日田市林業振興の組織体制は部長以下 22 人、製材工場は 54 工場、森林組合は 2 つあり、職員 86 人作業員数 166 人などがこのビジョン実現のための大きな柱となっていると思った。そして様々な補助金などの助成なども行なっておられ、主なものに「木づかい促進事業の実績」として新築、リフォームなどに日田の木を使用した場合、補助金が支給されるようになっている。

長い年月をかけてここまで研究しつくされ、全てに感服した。

これからビジョンを作成する安来市にとって問題は山積だが、先人の知恵を借りながら、着実に夢の実現に向けて頑張っていただきたい。

○ 内田 卓実 副委員長

日田市の林業、木材産業は、高温多湿な気候の中に森林土壌等の恵まれた自然条件と、その資源を古くからの積極的な技術導入や造林奨励、篤林家の存在等により

豊富なスギ資源を有する地域である。原木市場では、市内はもとより周辺地帯から多くの原木を集荷、選別、販売と原木市場も発達しており、価格形成と安定供給という重要な役割を果たしている。

原木の形状ごとに専門化された製材工場などにより製材コストの削減にも努めておられ、市内では下駄、家具、クラフト等の木工業も盛んであり、地域内での木材利用率の高さが特徴で、林業、木材産業が基幹産業の1つであるように古くから林業、木材産業が盛んな地域である。

近年、多発する豪雨、台風等の自然災害への対応、林業就業者、林業事業体の確保、住宅着工戸数の減少による構造材需要の低下など森林、林業、木材産業現状と課題、また、長期的な視点が必要である一方、木材産業は刻々と変化する情勢に柔軟な対応が求められる。長期的な視点を見据えつつ日田市の基本構想である第6次日田市総合計画に合わせ日田もりビジョン社会、経済情勢の変化等に、柔軟に対応できるように4年ごとに必要に応じて見直しを行い、森林、林業、木材産業振興の基本としています。

線状降水帯の発生などによる豪雨で、山地被害や流木被害が続くことで、より一層の防災、減災対策が必要とされる。災害に強い森林づくり、資源、技術、雇用の循環を目指した主伐、再造林の推進、森林経営管理体制による森林整備の促進を重要施策とし、森を守り、育てている。面積の半分以上が森林であるこの安来市もこれから森林ビジョンがつくられていくが、産業はもちろん、環境や災害も視野に入れ、地域資源を十分に生かしていく方向に進んで行くように提案していきたいと思う。

○澤田 秀夫 委員

日田市は、日田杉で知られる日本でも有数の木材産地である。市の総面積は、約666㎢でその内80%を山林原野が占めており、文字通り林業が盛んな地域である。国からの森林環境贈与税は、年間約3億円（全国3位）で本市と比較すると6倍～7倍の交付金が付与されている。このことから如何に林業が市の中心産業になっているのかが伺える。原木市場が7つ、製材所が54カ所で部材毎に専門化されているもの特徴的である。また、木材の水分を20%以下にするため乾燥施設を18カ所整備しており、木質バイオマスをエネルギーとした乾燥方法である。

林業従事者は、515人で近年若者の就業も少し増えているというが、高齢化が進み担い手の確保の課題も重視されている。市内に県立の林業高校があるが、全国からの留学は認められていない。県には要望中のようなのであるが、実施されることを期待する。

林業従事者の平均年収を伺うと、バラツキがあるものの200万円～1,000万円の回答がされた。

本市も森林ビジョンを作成中であるが、就業人数の増加、安定的な年収確保など、夢のある森林ビジョン作成に期待をする。最後に林業の先進的な地域は、地籍調査が完了していることも付け加えておきたい。日田市の場合は、20年前に完了済とのことである。

○ 三島 静夫 委員

日田市における林業振興の取り組みは森林ビジョンに基づく具体的な取り組みに進んでおられた。林業振興によるまちづくりをコンセプトに市内産の木材の需要拡大に力を入れておられた。

これまで会派視察などで林業振興の先進地にくつかり伺ったが、どこも製材及び木材加工品の販売先を近隣の都市をターゲットにしておられたが、日田市においては林野庁から副市長を招聘し、全国規模での販売ルートの獲得を目指しておられることには只々感心するばかりであった。

安来市においては今年度森林ビジョンの策定予定である。森林ビジョンの策定には地籍調査の進捗度は影響しないとの説明を受け安堵したところであるが、林業ビジョンに基づく事業計画の説明を伺う中で、地籍調査が進まない安来市において、具体的な計画策定な遠い未来の話になるのではと思わざるを得なかった。今後の安来市における林業振興は現状の林業関連企業の状況を踏まえ、広域連携による事業となるのかと考えてしまいますが、日々森林は成長し、様相が変わっていく中、早期に安来市が行わなければならない森林対策事業は何かを捉え、そこに集中して取り組まなければならないのではないかと強く考えさせられた視察であった。

○ 岩崎 勉 委員

本市の林業振興施策の具体例を視察するため日田市へうかがった。

日田市は国土調査が終了しており、筆境等の森林・林業政策策定のための基礎的なデータが国・県の事業によりほぼ完了していた。そこで、本市担当部長が「国土調査等が完了していなければ、森林ビジョンは策定できないのか」との質問に対し、日田市担当者は「国土調査が完了していなくても森林ビジョン策定には大きな影響はない」との見解を示されたため安堵したところである。

また、課長や担当者の皆さんは、林業振興課に何年間勤務しているのかと問い合わせたところ「現在4年目だが、通算では12年目となる」といった複数回勤務・多年勤務との回答が多く、自治体の事業として一定の成果を出すためには、2～3年での人事異動を行ってはいけなと改めて感じた。本市も人材育成や産業振興の観点から見習うべき人事ルールだと改めて認識した。

○ 清水 保生 委員

日田市における林業関連事業は、日田市の基幹産業ともいえる重要な事業である。林業振興課の職員は、森林整備係7人、有害鳥獣対策係4人、林業振興係4人、基盤整備係5人と課長を含め21人体制であり、県内でも人員規模的には大きい。

日田市の林業・木材産業の特徴として、豊富なスギの人工林資源がある。また、市内7か所の原木市場では、市内はもとより周辺地域から多くの原木を集荷、選別、販売しており、価格形成と安定供給という重要な役割を果たしている。製材工場は原木の長さ、太さ、形状ごとに専門化しており、製材コストの削減に努めている。

また、市内では下駄、家具、クラフト等の木工業も盛んであり、地域内での木材利用率は高い。

日田市では、令和5年度に「日田もりビジョン」の見直しを行っている。

日田市が目指す森林・林業・木材産業として、3つの施策ごとに以下のような目指す方向性を提示している。

(1) 森林（もり）を守り育てる

- ・多面的機能を発揮する豊かな森林づくりと持続可能な森林経営の推進

(2) 森を活かす

- ・素材（丸太）の安定供給体制の整備、日田材の需要拡大・販売体制の強化、森林資源の有効活用の推進

日田スギを活用した雑貨・小物、林間ワサビ園場、木質バイオマス発電所等

(3) 森でつながる

- ・市民の森林・林業・木材産業への関心・理解、保全活動推進、森林資源を活用した地域の活性化、森林・林業・木材産業を支える担い手の確保・育成

- ・植樹祭、親子木工教室、森林教室、フェイスブックによる情報発信、日田林工生の実習等

日田市は、平成23年12月に大分県下では最初に「公共建築物における地域材の利用の促進に関する基本方針」を策定し、公共建築物木造化・木質化に取り組んでいる。

- ・高瀬小体育館、咸宜（かんぎ）小学校、大明小・中学校、市役所総合案内等
林業成長産業化に向けた取り組みとして、大径材を活用した無垢の梁桁等の加工・乾燥技術の確率のため、大径材を製材するための帯鋸盤の施設整備を行っている。

林業成長産業化に向けた取り組みとしては、小中学校入学時に、集成材加工した机の天板をプレゼントし、学校生活の思い出として一緒に卒業（成長に合わせ大きいサイズに付け替えたり、傷ついた場合は補修もされる）するという「きみの木」事業は素晴らしいと感じた。

日田市では、既に森林・林業・木材産業振興ビジョンが策定されており、令和5年度に改訂されている。

当ビジョンは、川上（上流域）での森林整備以上に川下（下流域）での森林資源の加工・商品化・販売等に重点を置いて策定されている。

また、数十年先を見据えた林業振興のあるべき姿を目標に大きな視点に立って策定されている。

安来市においては、未だビジョンの策定がなされていないが、あまり目先のことに囚われすぎず数十年先を見据えた夢、希望の持てるビジョンの早期策定が望まれる。

2. 株式会社宇佐養魚

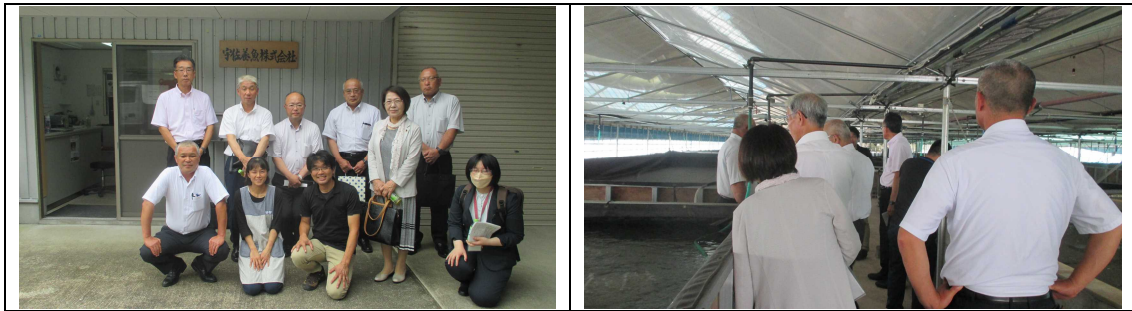
◆ 会社概要

施設名称 宇佐養魚株式会社
所在地 大分県宇佐市院内町月俣 45 番地
設立 2013 年（平成 25 年）
事業内容 水産物の養殖・加工・販売

◆ 説明概要

1. 無泥どぜう養殖について
2. どぜう養殖場見学

《宇佐養魚》



◆ 考察

○ 福井 加代子 委員長

社長の話の中でかねてから興味のあった水産養殖の事業を立ち上げたきっかけの一つが東京の浅草の老舗「駒形どぜう」で味わったどじょうの美味しさに衝撃を受けたことと伺った。大きく領けた。同じように私も安来では味わったことのない美味しさに衝撃を受けたのだ。

平成 15 年、挑戦は始まったが困難の連続でやめようかと思ったのも一度や二度ではなかったと話された。

誰も成し遂げていない、どじょうの養殖で日本一になりたいという思いを胸に課題に取り組み、稚魚の餌である動物プランクトン「ツボワムシ」を安定培養する養殖技術開発に成功。

この独自の技術開発と大分県が開発した無泥による養殖技術を発展させ、そして、飼育水は温泉かけながし、温泉は軟水で pH9.7 の天然アルカリイオン水。出荷前はオリーブオイルを配合した独自の餌を与え、適度な脂とぬめり強化で見た目も美しいどぜうの誕生となった。起業から 10 年、生産量は飛躍的に増加。国産どじょうの生産量日本一の大分県の年間生産量は 20～30 トンその半分以上を担っているこの宇佐養魚。量だけでなく質の高さにも定評があり「駒形どぜう」や、どじょうのかば焼きが名物の金沢からも絶賛。

施設内の見学もさせていただいた。水の中を泳ぎ回るとじょうは、生まれて初めて見たが10メートル位も勢い良く走るように泳ぐとじょうもいたり、頭だけ出して泳いでいるとじょうはヘビのようで、やはりとじょうは泥の中にいるのが自然のようにも感じた。

とじょうのからあげなどの試食もさせていただいたが、確かに泥臭さはなかったが、あの独特の泥臭さが良いと言う人もいて賛否両論のようだ。

丁寧に説明、案内して頂き恐縮した。それが安来市さんにお世話になった恩返しだと何回も言われた。

現状に満足することなく、数年前から取り組んでおられる「ナマズの養殖」など新たな挑戦も続けておられる。この成功には周囲の方のサポートがあってこそと言われているが、私はこの日高社長の信念と人柄に他ならないと感じた。

安来とじょうは宇佐養魚と違い長い歴史がある、とじょうすくいのとじょうとして安来とは縁の切れない安来とじょう。安来市も日本一となるような夢のあるビジョン、事業計画を立てて頑張って頂きたいと考えるし、私達も応援していかなければならない。

○ 内田 卓実 副委員長

宇佐養魚（株）さんは大分県農林水産研究センター開発の無泥養殖法という技術を導入している。卵から親魚の育成まで養殖場内だけで完結する完全養殖。外界と遮断された屋内で行うため、病原菌や寄生虫の心配が少なくとじょうが逃げ出し自然界に影響を与えることもない。ツボウムシという自家培養の動物プランクトンを与え、飼育水は源泉かけ流し。温泉は軟水で pH9.7 の天然アルカリイオン水、この近辺では 350m ぐらいボウリングすれば温泉が出てくるそう。またオリーブオイルを配合した独自の餌を与え、適度な脂とぬめり強化により、見た目も美しいとじょうになる。

ここ大分県では稚魚期の飼育方法の改善によって種苗が安定的に確保できるようになったことに加え、養殖管理技術が向上したことが生産量の増加に貢献し、養殖とじょう日本一を誇っている。とじょう掬いに代表されるとじょうの養殖も泥のなかだけではなく温泉水を利用して一年中同じ環境で養殖することで、市場に安定供給できるメリットがあるがここにたどり着くまでに何回も挫折を繰り返し苦労されたようである。

自分の中ではとじょうは泥の中にいるものという感覚はあるが、その地域の地形や条件はさまざまであるなかで、その地域の資源を利用し、地域の特色をいかした特産にしていこうということも必要と考える。

○ 澤田 秀夫 委員

宇佐養魚（株）は、養殖とじょう日本一の会社である。稚魚期の飼育方法は県の支援を受けているが、その他の支援は無いようである。養殖方法は、本市の田んぼを使った有泥養殖と違って無泥養殖である。pH9.7 というアルカリ性の温泉水を使った養殖方法で、源泉は地下 350m、温度は 38 度の温水をかけ流しで使用されてい

る。夏場の温度は 20 度から 30 度で人の手によって管理されている。稚魚は 4 カ月で出荷するまでに成長するため顧客要求にあわせた管理が必要になる。何よりどじょうの骨の硬さを重要視されている。最大出荷量は 20 t で、令和 5 年 12 月時は 13 t のようである。水槽を見るとどじょうが水面に頭を出して走っていく姿が見られ非常に驚いた。まるでエリマキトカゲのようである。また、かば焼き用の大径（胴 30 mm）も養殖されており、安定的な出荷をされていた。ご厚意でどじょうのかば焼きをごちそうになったが、ウナギと比較しても遜色ないおいしさであった。

本市と養殖方法は違うが、それぞれの養殖方法の特徴があるらしく本市のどじょう養殖にも称賛されている部分があった。本市のどじょう養殖も高齢化が進み、今後生産者の確保が課題になる。どじょうというブランドをお互いに切磋琢磨し盛り上げていけるような支援を考えたい。

○ 三島 静夫 委員

かけ流しの温泉水を利用した養殖は適切な水質・水温が安定して得られることから、生後 4 ヶ月で出荷できることを可能にしたことには驚かされた。味は泥臭くなく骨の発育が遅いためなのか、柔らかい質感で油ものり万人好みのどじょうとなっていた。

しかし、短期間での養魚であるため日々の作業が煩雑で、経営者からは休みが取れない状況を伺い諸手を揚げて取り組む事業ではないと感じた。

また、詳しくは説明がなかったが、奇形のどじょうを観察し、自然界では観察できないどじょうの生態研究や餌の研究など新たな知見を求める取り組みもおこなっておられ、どじょう養殖事業の振興を考えておられるのではと思った。

安来市においても取り組むことのできる可能性はあるが、様々なハードルがあると考えます。

○ 岩崎 勉 委員

本市に限らず、通常のどじょう養殖は水田等の泥がある水田を利用しているが、宇佐養魚（株）では無泥養殖で温泉水を利用しているとのことから、本市どじょう養殖の技術革新につながるのではと考え視察にうかがった。

敷地内から豊富に湧き出る温泉水を、かけ流しで利用し 4 カ月程度で出荷すること。水田ではなく施設内で養殖するため、逃げ出すこともなく病原菌や寄生虫に影響されることもないとのこと。育ったどじょうは、今まで見たこともないような 30 cm 程度に成長している個体もあり、泳ぎ方もこれがどじょうか！と驚きの泳ぎっぷりを見せていた。

県や市からの支援がない中にもかかわらず、敷地内から豊富に湧き出る温泉水や、多年にわたる社長やご家族の技術開発と努力は、簡単に真似ができるものではなく、この土地とこの人でなくては成しえなかった養殖技術であったが、餌の開発など本市におけるどじょう養殖の参考となる視察となった。

○ 清水 保生 委員

宇佐養魚の無泥どじょう養殖は、水槽内での養殖である。一般的などじょう養殖は圃

場によるものが多いと思うが、当該養殖方法は珍しく、また大分県内でのどじょう養殖業者は宇佐養魚 1 社のみである。

この養殖技法に至った理由としては、敷地内から温泉水（温度 38 度、ph9.7 のアルカリ水質）が自噴したことによるもので、24 時間、365 日、温泉水のかけ流しにより養殖が可能となっている。水槽内の水温は 20 度～30 度程度となっている。

温泉水による養殖のため、どじょうの成長は早く、10 数センチの出荷できるサイズには 4 か月程度しか要しない。泥を用いないので臭みは無く骨も柔らかく食べやすい。このサイズは柳川、から揚げに向いている。出荷前はオリーブオイルを配合した独自の餌を与えることで、どじょう本来の味を邪魔することなく適度に脂をのせる工夫も施されている。

かば焼き用として 20 センチサイズのものも出荷されている。ハウス内には、サイズ分けされたどじょうの水槽が複数設置されており、餌は自動により給餌される。

水槽内のどじょうは逃げることがないので効率は良いが、一旦水質が悪化すれば水槽内全てのどじょうが出荷できなくなるというリスクも抱えている。そのため、365 日朝と夕の職員による施設内の点検は欠かせないという。

安来市でも温泉を利用した養殖が可能ではないかと思っていたが、水温や水質の管理といった微妙な問題があり、温泉水なら何でも良いというものではないとのこと。

当該施設では年間 12～20 トン（安来市の 5～6 倍）を生産している。多くの視察者が訪れるとのことであるが、誰にでも真似できない高い技術に経営者の自信を感じた。

3. 日本ジビエアカデミー

◆ 会社概要

企業名称 有限会社サンセイ

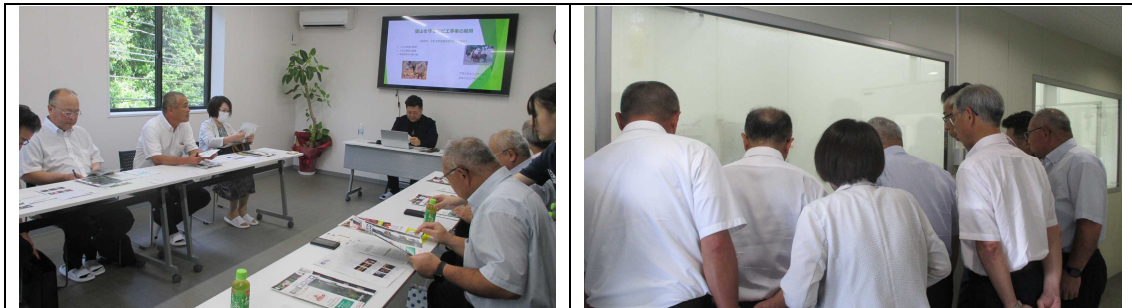
所在地 大分県宇佐市院内町香下 130-1

製造場所 安心院ソーセージ 宇佐ジビエファクトリー

◆ 説明概要

1. 鳥獣害防除・捕獲・処理・活用技術
2. 解体処理施設見学

《日本ジビエアカデミー》



◆ 考察

○ 福井 加代子 委員長

ジビエ処理研修施設「日本ジビエアカデミー」が日本で初めて2023年5月16日にオープンしたということで安来市も鳥獣被害が年々、多くなる中、注目の研修となった。

最初の30分、社長の説明があったが、試行錯誤しながらここまで来たという自信と誇りは私達をうならせた。

まず、シカやイノシシは美味しい時期とそうでない時期があり、処理方法、年齢、雌雄、大きさも大きく味に関係していて、美味しい所を人間がいただき、食べ難い肉は近くのアフリカンサファリの動物の餌にして無駄のないように処理加工されている。

毎日ほとんど搬入されるシカ、イノシシ、それをすぐ解体処理、鮮度が良いことも美味しさの条件。当日、屠体の搬入があればという事だったが、猟師さんの所にわざわざ取りに行かれての見学となった。

実際に剥皮、内蔵摘出、解体から脱骨、部位分けまでの見学はさすがに私は全部、見られなかった。

各冷蔵庫にヒートガラスを入れ衛生に配慮し、入室せずに作業を回廊式で見学できた。

今後、地域のシカやイノシシの捕獲数を上げ、害獣から農林業への被害を減少さ

せる貢献をしたい。そのために 猟師への協力と技術のレベルアップ、学校等へのジビエ利活用のための出張授業で食育、ジビエの成分や栄養価の評価の取り組みなど検討しているという事であるが、例えば、カラスをジビエ対象とする検討とか、今後、限りない社長の挑戦が続くと思う。安来市でも猟友会を中心に鳥獣被害対策として検討してみてもどうか。

○ 内田 卓実 副委員長

大分県は、シカ、イノシシなど有害鳥獣の捕獲頭数が北海道に次ぐ2位である。ここ、(有)サンセイさんはもともと食肉加工を営まれていたが、多発する有害鳥獣による農作物被害により、捕獲された有害鳥獣の処分方法について農家の方に相談されたことがきっかけでこの日本ジビエアカデミーをつくるきっかけになったそうである。

実技のほか、ジビエの基礎知識、衛生面、栄養面、美味しいジビエの作り方まで学ぶことができ、要望により狩猟から食肉加工、ジビエ料理、販路開拓、開業支援までやっておられる。施設は衛生面もしっかり管理され搬入から加工するまでの工程をガラス張りの回廊式で見学することができ、食の安全をしっかりと確保されていることがよくわかった。

ジビエには処理方法、年齢、雄雌、個体差等により人間の食用に適さない肉があるが、宇佐市には日本を代表する九州自然動物公園アフリカンサファリがあり、動物版地産地消を行い、猛獣の餌として無駄のないように処理加工している。学校給食のメニューにもジビエを取り入れてもらいジビエを使った食育にも取り組みジビエ料理を普及していく取り組みをしておられた。

安来市でも有害鳥獣被害は年々増加傾向にある。また、捕獲した有害鳥獣の処理施設も少なく、商品としてジビエを活用できるところもないのが現状である。

有害鳥獣捕獲後の処分には危険も伴い猟友会の方々を含めた捕獲者の高齢化も問題視されている。捕獲された有害鳥獣も地域資源の一つととらえ、食育も含めた販路の確立、今後有害鳥獣対策の一つとして取り組みが出来るような環境の整備を整えていくことにより人材育成、確保にも貢献していくことが、有害鳥獣対策をすすめていくうえで必要であると感じた。

○ 澤田 秀夫 委員

ジビエは、イノシシやシカなどの野生動物のことである。大分県は北海道に次ぐ野生動物の捕獲頭数を誇っている。有害鳥獣被害に遭っている農林業生産者にとっては、深刻な問題である。野生動物の生息は標準で1㎢当たり3頭であるが、県内の場所によっては、1㎢あたり76頭が確認されるところがあるほど、野生動物が繁殖している。平成30年から700頭を目標に捕獲をしてきたが、令和5年度には1,632頭の捕獲がされた。この施設は、農林水産省の国産ジビエ認証施設（全国26カ所）と認められ、毎日のように罠で捕獲した野生動物が運ばれてジビエ料理として加工されている。

ジビエ食品には、「まずいジビエ」と「おいしいジビエ」が存在するという。そこには、ジビエの処理方法に問題がある。野生動物の捕獲時には、冷凍車で処理施設に運搬し、冷蔵施設で工程ごとに素早く解体することによって、臭みもない「おい

しいジビエ食品」ができるということである。細菌検査も抜き打ちでされており、食に対する安全確保にも十分に配慮されている。

不思議なことに Z 世代と言われる若者の皆さんが食肉解体等を担っていることである。SDGs の考え方が普及したのかも知れないが驚きである。

本市も鳥獣被害対策で毎年 1,000 頭以上の野生動物を捕獲するが、今後も捕獲頭数は更に増加すると見込まれる。いろいろな業者を巻き込んで、こういった施設を検討することも必要性であると感じた。

○ 三島 静夫 委員

訪問した宇佐ジビエファクトリーのような施設の存在は、害獣対策を飛躍的に推進できる施設であると強く感じた。

良質な肉の確保体制の確立（狩猟現場に赴き血ぬき、保冷車による搬送）、個体選別による食用肉の質の向上、食用不適切肉の活用（動物園の飼料、ドッグフード・漢方薬としての活用）、迅速な解体技術の考案及び解体施設の整備、認証取得のための衛生管理、食肉の加工・販売（学校給食への提供など）と一連の体制を構築してジビエによる収益を上げておられる。

また、害獣買取による狩猟者の収益増、報奨金申請のための手続き代行などをおこなうことにより、狩猟者の害獣捕獲意欲を上げることにも務めておられる。

害獣対策を推し進め、地域資源の活用による地域還元型のビジネスプランの中心となっている。

鳥獣肉の処理施設は全国に 900 箇所あるとのことであった、安来市にも一か所あるが、その多くは猟師系のジビエ処理場のレベルの低い、肉の知識のないところが多く、国産ジビエ認定を受けている施設は 29 か所であるとのことであった。

さらに、この施設は若い世代からの就職希望が多いという状況であるとの話にも驚かされた。

この度の施設は民間資本によるものだが、市営、指定管理、第三セクターなどの施設もあり、今後安来市として毎年増加状況にある害獣対策をより推進するために、宇佐ジビエファクトリーのような施設設置も考えていく必要があると強く感じた。

○ 岩崎 勉 委員

イノシシやシカ等による農作物や林産物への被害が年々増加傾向にある中、有害鳥獣の捕獲から解体、食肉加工と一貫研修できる施設があると聞き、現地へうかがった。

社長は、基本は飲食店経営や食肉加工業を営んでおられたが、地域の高齢農業者から、有害鳥獣被害が続く農業を止めようと考えているとの話を聞き、自分で何かできないものかとの「使命感」から事業を始められた。

野生動物の肉を研究し食肉としての利用方法をいくつか考え出された。雄と雌の違い、処理技術、ジビエの栄養価などそれぞれの利用価値を見出し、市内にある九州自然動物公園アフリカンサファリの猛獣用の餌としても活用しつつ事業展開している。イノシシやシカも毎日 5～6 頭の搬入があり、狩猟者へも行政からの助成金

とは別に食肉として買い取ることで、狩猟者からも喜ばれている。

近年では、20～30 歳代の研修生を受け入れ、罠の掛け方から解体手順・方法や食肉加工まで指導・育成に力を入れている。

本市の現状では簡単に導入できないシステムや施設と人材を視察する結果となったが、有害鳥獣の命を頂くといい観点からも広めていきたい事業だと思った。

○ 清水 保生 委員

当地域のジビエは主に、イノシシとシカである。

当該施設では、捕獲された獣を食用とペット用等に分けて処理流通している。野生獣は一般的に成長に併せて獣臭（所謂加齢臭）が高くなり、食用としては向かないとのことであるが、ジビエの多くはこれら食用に向かないものまでが販売流通されていることが多く、これによりジビエの評判を落としているとのことである。

また、一部解体処理技術が未熟な者による物も同様に評判を悪くする一因とのこと。

当該施設では、若い獣は食用、それ以外はペットフード等に利用されており、解体処理も専門のスタッフにより行われている。

当日は、シカの解体処理を見学させていただいた。剥皮・内臓摘出・解体から脱骨・部位分けを解説付きで間近で見ることができた。

処理室は処理の段階ごとに分けられており、全室冷蔵状態となっている。

獣個体は猟友会等から随時搬入されてくるが、当該施設では搬入個体を買って上げしており、また国の有害鳥獣捕獲奨励金申請等、一般的に自治体が行う業務も行っている。

猟友会は国や市からの捕獲奨励金のほかに、当施設からの買取金も貰えるということになる。

当日はサンプルとしてシカ肉を試食させていただいたが、臭みは無く柔らかくて美味であった。

ジビエの良さを広めていくためにも、安来市でも処理施設の建設を検討してはとのことであるが、その際には、食用とそうでないものをきちんと仕分けする必要があるとのことである。

この度の視察を通して、ジビエの未知なる可能性を大いに感じた。